

男從三位乙麻呂之孫、爲人經々、不護禮度、雖好仙道、控地不登、大同之初、緣坐伊豫親王事、左降下野國守、弘仁年中、有恩入京、授從四位下、俄任相摸守、病發卒官、年五十六、

〔十訓抄^七〕河内國金剛寺とかや云山寺に侍りける僧の、松の葉を食ふ人は、五穀をくはね共くるしみなし、よく食おほせつれば、仙人ともなりて、飛びありくと云人有けるを聞て、松の葉を好くふ、誠にくひおほせたりけん、五穀のたぐひくひのきて、やうく兩三年に成にけるに、げにも身も軽く成こ、ちしければ、弟子どもにも、我は仙人に成なんとするなりと常は云て、今にとて内にて、身を飛ならひなどしけり、既に飛て上りなんと云て、坊も何も弟子どもに分ち讓て、上りなば仙衣をきるべしとて、如形腰に物をひとへ巻て出立に、我身には是より外は入べき物なしとて、年比秘藏して持たりける、水瓶ばかりを腰に付て已に出にけり、弟子同朋名殘惜悲び、聞及人遠近市の如くに集て、仙に登る人見んとてつどひたりけるに、此僧片山のそばにさし出たる巖の上に登ぬ、一度に空へ登りなんと思へども、近く先遊て、事の様人々に見せ奉らんとて、彼巖の上より下に生たりける松の枝にゐて遊んと云て、谷より生上りたる松の上、四五丈ばかり有けるをさけさまた飛、人々目をすまし哀をうかべたるに、いかっしつらん、心や臆したりけん、兼て思ひしよりも身重く、方うきくとしてよほりにければ、飛はづして谷へ落入ぬ、人々あさましく見れども、是程の事なればやうあらん、定て飛あがらんずらんと見るほどに、谷の底の巖にあたりて、水瓶もわれ、我身も散々に打損じて、只死にしぬれば、弟子眷屬さはぎ寄て、いかにと問へどいらへもせず、僅に息の通ふばかりなり、けれど、とかくして坊へかき入つ、こゝに集れる人笑ひの、しりて歸りけり、さて此僧有にもあらぬやうにて痛臥り、とかくいふばかりなくて、弟子も恥かしながらあつかう間、松の葉ばかりにては命生べくもみえねば、年比いみじくひのきつる五穀をもて、さまざまいたはり養へば、命ばかりはいけれども、足手腰もうち折て、起居も